

ガス料金支払い用のはがきを持って外に出た。 昼のあたたかさは既になく、肌寒さに鼻をすする。花粉が飛びはじめたので夜も過ごしやすくなったかと思っただ、まだそういうわけではないらしい。 昼のあたたかさを思い返す。

「正しく三寒四温だな」

ちいさくつぶやいた。

ガチャガチャ、と隣人が鍵を開けようとする音がした。

俺は知人が出てくるのを待った。 コンビニに行くようなら一緒に行こうと思った。

「あら、こんばんは」

半袖姿の江崎さんは眼鏡をかけていた。彼女は家にいるときは眼鏡をかける。家にいるとき、というか会社に行くとき以外は、というのが正しいかもしれない。

「こんばんは、コンビニですか」

「いいえ？ クリーニングに」

服を取りに行くらしい。彼女はクリーニング店のハンガーを持ってはいたが、預ける服を持っていなかった。この人はやはりこういうところはちゃんといっている。

ギャップに、少し口角を上げる。

「じゃあ、お気をつけて」

「ちよつとまってよ、コンビニ行くなら一緒に行こうよ」

「方向逆ですよ」

俺がいくつもりのコンビニはセブんだ。 たしかに国道沿いのクリーニング店に行く途中にもファミマはあるが、セブンの方が近い。歩くのなら近いほうがいい。

「いいじゃん、一緒に行こうよ」

身体を寄せてきた彼女は肩でつついてきた。

「ね、行こうよ」

黒髪で眼鏡姿の江崎さんは一見真面目そうだが、きっと学生時代はいろいろ愉しんできたのだろう。 なにか聞いたことがあるわけではない。 自然とそう思わざるを得ない。

「そうですね。 素敵な女生と過ごす時間は長いほうがいいですから、そうしましょうか」

「……っ……で、でしょ」

自分から近づくくせにからかうと照れる彼女はなかなかからかいがあった。

「じゃ、いきましょ」

並んで歩きながら、様々な話をした。 仕事の話、上司の愚痴、趣味の経過、今朝聞いたラジオの話、最近買った服の話、行く予定の旅行の話。 それらの話は当然往復十分程度の道程で話し切れない。 途中、道を逸れて近所の公園のブランコに座った。 梅の花が月夜に映えていた。

「素敵な夜だねえ」

江崎さんは足を揺らしていた。 明らかに上機嫌でいた。